

ブドウ「クィーンニーナ」の特性と栽培技術

～大粒で鮮紅色の着色良好な種なし果実を生産するためのポイント～

上林 義幸（農業総合試験場園芸研究部落葉果樹研究室）

【平成26年2月17日掲載】

【要約】

「クィーンニーナ」は果皮が鮮紅色で果粒が大きい、食味良好な品種である。種なし栽培に適し、種なし化のためには「巨峰」や「ピオーネ」と同様に、満開3日後と10～15日後の2回、ジベレリンの25ppmを処理する。樹勢は強めに維持し、棚面がやや明るくなるよう新梢管理するのがよいが、果実の日焼けに注意が必要である。1房の大きさは500g、10aあたり着果量を1,200kgにとどめることで着色良好な果実が生産できる。

1 はじめに

これまで栽培されてきたブドウの赤系・大粒品種は、着色良好な果実を生産するのが難しく、特に近年では夏季の高温による着色不良果の発生が増えている。生産者からの、着色しやすく、大粒で食味のよい赤系品種を望む声に応え、(独)農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所が育成したのが「クィーンニーナ」である。

2 「クィーンニーナ」の特性

樹勢は「巨峰」と同等かやや強い。種あり栽培では「巨峰」よりやや花ぶるいしやすいため、ジベレリン（以下GAと略す）処理を行い、種なし栽培することで着粒が安定する。試験場内での試作では、発芽や開花は種なし栽培の「巨峰」より3～4日遅く、収穫時期は1週間から10日遅い。果実は果皮が鮮紅色で、果肉は硬めで、果肉特性は噛み切りやすく（崩壊性）、果実の皮離れは「巨峰」よりやや悪いが、気になるほどではない。裂果はほとんどない（表1）。試験場では1粒が平均15g程度だが、育成元の果樹研究所では18～20gになるとしており、「ピオーネ」と同等に大粒である。糖度は20%以上で酸味が少なく、食味は非常に良い（表2参照）。



「クィーンニーナ」

表1 試験場内の試験樹の主な特性

品種	樹勢	着粒	果肉		果実			生育時期(月日)			
			特性	硬度	香り	はく皮	粒形	裂果	発芽	満開	収穫盛
クィーンニーナ	強	中～密	崩壊	硬い	微フォクシー	やや難	短楕円	無	4/17	6/1	8/23
種なし巨峰	強	中～密	中間	中	フォクシー	中	短楕円	無	4/13	5/29	8/14

生育時期はH17～H25の平均

3 基本的な栽培技術

ほとんどの栽培管理は、「巨峰」や「ピオーネ」の種なし栽培に準じて行えばよい。留意する点については以下のとおりである。

(1) 種なし化のための植物生長調節剤（以下植調剤と略す）の使用方法

種なし栽培で用いるジベレリン（以下GAと略す）、フルメット（以下Fと略す）については、「巨峰」「ピオーネ」と同じ「巨峰系4倍体品種」の農薬登録内容に従って使用する。

植調剤の使用方法について、図1の3つの方法を比較したところ、GAの処理濃度は、「ピオーネ」と同じ12.5ppmでは果粒肥大が劣り、「巨峰」と同じ25ppmで処理する方が大粒になった。GA25ppmにF10ppmを混入して、満開3日後に1回だけ処理する方法も可能だが、GA25ppmの2回処理より果粒肥大が劣った（表2）。

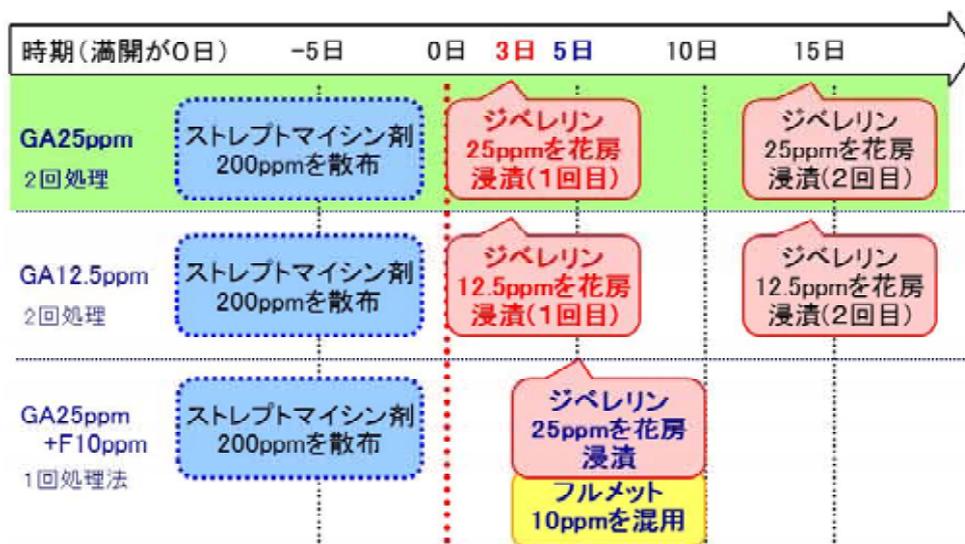


図1 種なし栽培のための3つの植物生長調節剤処理方法の概要

表2 植物生長調節剤処理方法の違いと果実品質(H21)

処理方法	1房重	1粒重	着粒密度	糖度	酸含量
GA25ppm 2回	g	g	粒/cm	Brix%	g/100ml
GA25ppm	609	15.3	0.38	20.0	0.48
GA12.5ppm 2回	457	13.2	0.32	20.3	0.47
GA25ppm 2回	493	13.5	0.36	19.4	0.49
GA25ppm+F10ppm 1回	446	11.6	0.39	20.5	0.47

GA：ジベレリン F：フルメット
点線の上と下は試験樹が異なる。

以上のことから、植調剤処理は図1の「GA25ppm2回処理」に従って行うのがよい。1回目のGA処理時期は満開期より遅めの満開3日後に行うことで、肥大不良な小粒果（ショットベリー）の着生が減り、摘粒作業時に取り除く手間が省ける。開花前のストレプトマイシン散布は、1回目のGA処理適期の幅を拡大し、確実に種なし化するために実施しておくのがよい。

(2) 花穂整形および着果管理

開花初期に花穂の先端 3 ~ 3.5cmを残して花穂整形する。これにより収穫時の穂軸は 8 ~ 9 cmとなる。摘粒は10段の支梗に27 ~ 30粒になるように行うことで、500g程度の果房となる。育成元の果樹研究所では、1果房を大きくしすぎないこと、10aあたり着果量を1,200kgまでにとどめることで着色が良好になるとしており、10aあたり房数の上限は2,400房がめやすとなる。

(3) 新梢管理

大粒の果実生産のためには、強めの新梢に着房させるのがよく、開花期に30cmに満たない、伸長の劣る新梢には着房させない。植栽当初は樹勢が旺盛だが、結実開始3年後頃から急激に樹勢が衰えることがあるため、樹勢の調節・維持に注意する。棚面を明るめにし、果房に日光が当たるようにする方が着色は良好になりやすい。「巨峰」や「ピオーネ」より新梢本数をやや少なめにし、新梢の摘心や副梢管理により、棚面に葉が2.5枚程度重なる状態にするのが適当と思われる。ただし、高温や強い日射による日焼けが発生しやすいため、極端に棚面を明るくしすぎないこと、7月中旬以降は気象条件によっては、果房に傘かけするなどの注意が必要である。